＜教育と社会＞研究　第17号　2007年

「新しい社会運動」のなかの成人学習
—スウェーデン女性運動によるラディカル成人教育の実践—

鳥取大学　太　田　美　幸

1　はじめに

成人教育や生涯学習をめぐる研究の多くは、成人教育を推進する社会的意義をその「公共性」に見出そうとする傾向が強く、教育の提供主体は公共的な性格をもつものであることが研究の前提とされてきた。このことには、1965年にユネスコで生涯教育論が提唱されたことを契機として、成人期の教育・学習の振興が社会的な急務であるという認識が広く普及したことが影響していると思われる。近年では、「国家的公共性」を相対化しつつ民主主義を担うエージェンシーとしてのNPOの教育力への注目が高まっているが[1]、そこでは、その活動が公益に資すると一般に認められる市民組織が分析対象とされる傾向があることは否めない。政治的・文化的対立の渦中にある集団が特定の利害・関心・価値観にもとづいておこなう運動はときに激しいバッシングに合い、そうした運動に含まれる教育的機能、あるいは運動の一環としておこなわれる教育的活動が積極的に評価されることは少なくなっている。

教育は本来、社会秩序を維持するために多様な個々人を社会に適応させ統合していく社会化の機能を担っている。社会化のプロセスにおいては社会生活に必要な知識が伝達され共有されねばならないが、伝達される知識やその基盤にある文化が客観的で中立的なものであるかのように見えるのはそこにヘゲモニーが作用しているからであり[2]、非支配的な文化は制度から巧妙に排除される。「生涯教育は政治的に中立ではない[3]」というジェルピの指摘は、生涯教育の理念が実行に移されるときに生じるイデオロギー支配に対する警告であると解釈してよいだろう。

かつてラヴェットらは、イギリスのリベラル成人教育が中産階級の個人主義的イデオロギーを労働者階級に受容させる機能を内包していることを指摘し、労働者自身の運動に根差した成人教育のオルタナティヴを「ラディカル成人教育 Radical Adult Education」として主張した[4]。成人教育にはその実践主体の社会観が反映され、教育を通じて実現されるであろう社会の展望もそれによって異なる。こうしたことをふまえれば、教育の「公共性」と「非中立性」とをどのように腑分けしうるのかという問題も浮上してくるだろう。特定の利害集団がおこなう教育活動の内実を明らかにする作業は、成人教育が、行政による振興も含めて本来的に中立的なものではないことを再確認し、支配的イデオロギーのもとで語られる「公共性」を問い直すために重要である。また、フォーリーの研究[5]が示すように、社会的政治的な闘争のなかでおこなわれるインフォーマルな学習の実相を記述していくことは、日常生活のなかに既存社会への異議申し立てを可能とする要素が内在していることを人々に知らせるためにも必要である。

成人教育は労働運動をはじめとする社会運動と密接にかかわりながら発展してきたが、現代的な社会運動と成人教育との関係性についての分析は十分に深まっているとはいいがたい。近年では、社会運動の文化的研究や「文化政治」論において集団的な文化活動を通じた認識枠組みの変容や行動変容の過程が注目されつつあるが、それらの過程は成人教育論で分析される成人の学習過程と大きく重なっている。人々が意識的であれ無意識的であれ何らかの運動とかかわりながら連帯感や集合的アイデンティティを醸成し行動を起こしていく過程を、成人教育（成人学習）の一側面として描くことによって、人々が学習を通じて自己の意識を変革し、延いては社会をも変革していく道筋がより鮮明に描かれるものと思われる。

本稿ではこうした課題意識にもとづき、組織化され制度化された成人教育が「新しい社会運動」とさまざまに連携している事例としてスウェーデ

ンの民衆教育に着目し、両者のかかわりの一端を記述していきたい。

2　スウェーデンの民衆教育と「新しい社会運動」

スウェーデンでは、近代化の波に直面した19世紀後半以降、様々な立場の民衆が各々の利害や関心に沿って結社を組織し多様な民衆運動（folkrörelse）を展開した。代表的な運動は、宗教復興運動から発展した自由教会運動、自由教会運動における社会改良活動の一環として生じた禁酒運動、社会民主主義思想のもとで勢力を強めた労働運動などで、20世紀前半には全国民の三分の一が民衆運動に参加したといわれる[6]。これらの運動において運動推進の手段として展開されたのが民衆教育（folkbildning）であった。各運動体は学習協会（studieförbund）あるいは民衆大学（folkhögskola）を設立して民衆教育を推進し、運動メンバーを育成するとともに、生活に密着した学習の場を多くの人々に提供してきた。民衆大学には地方自治体が設置するものもあり、民衆運動団体が設置する民衆大学はこれと区別するために「運動学校　rörelsefolkhögskola」と呼ばれる。民衆大学には1919年（一部には1873年）から、学習協会が運営する学習サークルには1947年から国庫補助金が支給されているが、学習内容については、国家は一切干渉しないことになっている。1960年代には、民衆教育の一部を継承するかたちで公的な成人教育制度が整備された。民衆教育の制度化も徐々にすすみ、現在では1991年制定の民衆教育法によってその体系が規定されている[7]。

民衆運動と密接なつながりをもっていた初期の民衆教育は、概してイデオロギー性が強く反体制的なものとみなされ、「ブルジョワ公共圏」に対抗する「プロレタリア公共圏」を形成していたともいわれる[8]。現在では、社会の安定化と民衆運動そのものの穏健化、公的な成人教育制度の充実、民衆教育に対する国家による財政支援などを背景として、民衆教育の闘争的性格は希薄化し、運動との直接的なつながりも薄れ、目的や方向性は多様に分化し複層化したと解釈される。しかしながら、民衆教育の場はなお対抗的ヘゲモニーを形成しうる公共圏であるとする主張もある。1960年代後半以降の「新しい社会運動」における民衆教育実践に注目するノルドヴァルは、スウェーデンにおける「新しい社会運動」のいくつかは現代的な民衆教育と密接な関係を持っており、それらの運動にとって民衆教育は運動推進の手段であると同時に運動の目的そのものであるという[9]。たとえば、トービン税の実現を目指して活動する社会運動団体アタックのスウェーデン支部、アタック・スウェーデンは、設立時の文書で「アタック・スウェーデンは、伝統的な民衆教育を通じて経済のグローバル化にまつわる問題に取り組む新しい民衆運動である」と明言する[10]。アタック・スウェーデンの民衆教育活動は、国内各都市で開催される「社会フォーラム」「社会主義フォーラム」の主催やそれらへの参加、さらにはブラジルのポルト・アレグレで開催される「世界社会フォーラム」への参加そのものであるという[11]。

2005年にストックホルムで開催された「社会主義フォーラム」が、学習協会の一つである労働者教育連盟（ABF）の講義プログラムの一つとしてラインナップされたことは、民衆教育が運動体とともに実践されていることのあらわれである。また、ABFが国内の社会運動諸団体の交流の場をつくりだそうとしている点も注目される。「社会主義フォーラム」は旧来の民衆運動と「新しい社会運動」との交流を目的の一つとし、労働運動のベテラン活動家と若いフェミニストたちがともに学ぶ場が設定されるなど、世代を超えた社会運動の連帯が模索されている[12]。こうした試みが学習協会の主導でおこなわれていることからは、現代の民衆教育組織がこうした運動の発展を支えるものとしても機能していることがうかがえる。

さらに、平和運動、環境運動、アジア・アフリカ・ラテンアメリカとの連帯運動を基盤とするフェルネボー民衆大学（Färnebo folkhögskola）も特筆すべき存在である。フェルネボー民衆大学の運営には16の社会運動団体が関わり、生徒のほとんどは何らかの運動体で実際に活躍する活動家である。教育内容の中心を占めるのはアフリカ、ラテンアメリカ諸国に出向いて現地の社会運動の支援をおこなう実習で、1-2ヶ月の事前学習ののち数ヶ月間現地に滞在し、貧困や社会的抑圧に対抗

するための組織づくりを中心に様々な活動をおこなう。なかには派遣対象国からの移民が生徒として参加し、母国で展開されている政府への抗議活動に加わる例もあるという[13]。ノルドヴァルは、アタック・スウェーデンやフェルネボー民衆大学の事例をもとに、「新しい社会運動」における民衆教育実践が対抗的な公共圏として機能しうるのではないかと述べる[14]。

しかし、民衆教育を通じて活動家が育成されているという事実のみをもってそのように結論づけることはむずかしい。ノルドヴァルがいうように民衆教育の場が対抗的ヘゲモニーを形成しうる公共圏であるならば、対抗的ヘゲモニーが形成される過程が何らかのかたちで確認されねばならないだろう。それを確認するための方法のひとつは、運動に積極的にコミットしていない人々がどのように運動の理念を理解していくのか、どのような過程を経てそれに共鳴していくのかを読み解くことではなかろうか。多様な価値の承認を要求する「新しい社会運動」は、社会的コミュニケーションから排除されてきた少数者の声を発信していこうとするものである[15]。そのような活動の中で学習の主体となるのは、運動を牽引し少数者の声を代弁する活動家だけではないはずだ。果たして民衆教育の場において、これまで声をあげてこなかった人々が異議申し立てをするに至るまでの学習過程、連帯感や集合的アイデンティティを醸成しつつ行動を起こしていく過程は見いだせるのだろうか。以下では、「新しい社会運動」の一つである女性運動の諸団体が運営する運動学校を事例として、そこでの教育が活動家ではない人々にどのように作用するのかを読み解いていきたい。

3　スウェーデンの女性運動と運動学校の設立

スウェーデンの女性運動は民衆運動の一部として発展した。男女平等政策の推進の結果として結婚制度にとらわれない家族関係が主流になりつつあるスウェーデンの現状は、反フェミニズムの立場に立つ人々からは伝統的な家族形態の崩壊とみなされ、あまりに急進的であるとして批判の槍玉に挙げられることも少なくないが、民衆運動が福祉国家体制の確立に大きく貢献したとみなされるのと同様に、女性政策もまた民衆運動の流れとの関連において理解される必要がある[16]。現在では、1970年代にはじまった「新しい女性運動 den nya kvinnnorörelsen」の流れを汲む諸団体が積極的に活動を続けているが、こうした運動は、各種制度の実現を自分たちの運動の成果であるとする積極的な認識に支えられている。

「新しい女性運動」を牽引したのは、第二波フェミニズムが高揚するなかで1970年に誕生した「グループ8 Grupp åtta」であった。グループ8は社会主義フェミニズムを理念として掲げる団体で、男性中心的な社会体制を戦闘的なスタイルで真っ向から批判した。その活動は多くの女性の支持を得た一方で、過激なやり方に反発する女性たちがより穏健な運動を求めたことによって、結果的に複数の団体が多方向から女性運動を盛り上げることとなった[17]。学界でも学生や若手研究者を中心に女性の置かれた状況を問題化する動きが強まり、各大学に女性研究者によるフォーラムが立ちあげられ、女性学やジェンダー研究の講座の設置もすすんだ。女性運動が活発化するにしたがって、活動家や女子教育の関係者らによって女性運動のための民衆教育組織の設立も模索されるようになる。運動の活発化にともなって民衆教育組織の設立が目指されるという点は、スウェーデンにおける社会運動の特徴であるといえよう。女性運動のための運動学校として1985年に設立されたのが、イェテボリ女性民衆大学（Kvinnofolkhögskolan i Göteborg）である[18]。

イェテボリ（Göteborg）は古くから商業で栄えたスウェーデン第二の都市である。イェテボリの女性活動家たちは、デンマークのフェメ（Femø）島で開催された「女性キャンプ Kvindelejr」での議論から、民衆大学立ち上げのための具体的アイデアを得たという[19]。ヨーロッパ各国から女性活動家が集まるこのキャンプは、女性だけの共同生活のなかで自分たちが対峙する問題について議論するというスタイルをとり、1971年から現在まで毎夏開催されている。イェテボリの女性活動家たちは1976年のキャンプに参加し、同年、女性民衆大学設立のための準備グループを立ち上げた。女性だけの空間で議論するというこのキャンプのス

タイルが、イェテボリ女性民衆大学における教育実践のモデルとなった。

同じ時期、イェテボリ民衆大学（Göteborgs folkhögskola）で学ぶ女性たちのなかに、女性の労働環境について議論するグループが形成されていた。彼女たちもまたフェメ・キャンプに参加して各国の女性活動家たちから刺激を受け、女性のための場をつくることの重要性を認識するようになっていく。彼女たちはまずイェテボリ民衆大学のなかで女性のみを対象とするコースを新設することを目指し、国会議員への交渉や請願、新聞への投書などの行動を開始したが、こうした女性たちの行動に対するイェテボリ民衆大学内部の男性たちの反発の激しさには目をみはるものがあったという[20]。男性たちの激しい敵対意識に直面した女性たちは次第に、既存の学校に女性コースをつくるのではなく、「自分自身の部屋」すなわち「自分自身の学校」を持つことを目指すようになったのである[21]。

ところで、イェテボリでは各運動体の間の協力と連携が比較的すすんでおり、特定の政治的立場に限定することなく女性の多様な要求に対応することを目指して、1975年に女性運動諸団体のアンブレラ組織である「女性センター Kvinnocentrum」が結成されていた。1978年には活動拠点として旧市街に位置する建物をイェテボリ市から賃借し「女性会館 Kvinnohus」が設立されている。ここにはイェテボリの女性運動団体が軒並み入居し、様々な会合や集会、学習会、相談事業等がおこなわれた。女性民衆大学設立準備グループとイェテボリ民衆大学のグループも、まずここで女性向けの学習サークルや休日セミナー、短期コースなどを開催するようになる。

イェテボリ女性民衆大学の設立に関わったリリアン・フルティンは、「イェテボリの女性活動家たちは、女性民衆大学における教育を通じて社会を変革することを目指した[22]」と述べている。彼女たちの活動は、女性たちの置かれている経済的・政治的・社会的状況はすべて家父長制的な抑圧構造によるものであるという認識を出発点としていた。こうした抑圧から解放されるためには、職業を持つことで経済的に自立すること、保育所設置によって育児から解放されることも重要だが、自らの可能性を探求するための場を持つことも不可欠である。彼女たちは、あらゆる社会関係のなかに伏在する男女の不均衡を自分たちの学習空間から徹底して排除することによって、女性にとっての生きやすさを模索しようとしていた。そのため、生徒だけでなく教師も職員もすべて女性のみとすることにこだわったのである。

既存の民衆大学のなかには、女性のみを対象とするコースを設置しているものも少なくない。ベーリット・ラーションによれば、スウェーデンではすでに19世紀末から複数の民衆大学で女性向けのコースが開講されていた。そのほとんどは女子教育に熱心な一部の教師による多分に個人的な取り組みで、短期コースを中心とし、教育内容にも性役割を前提とする偏りがあったという[23]。運動学校が設立されるようになった20世紀初頭以降は初期にみられたような男女間の教育内容の違いも徐々に減少したが、1970年代の「新しい女性運動」の高揚にともない、民衆大学における女性向けコースの位置づけそのものがフェミニズムの立場から問われるようになる。イェテボリ女性民衆大学の誕生は、従来のスウェーデンの民衆教育がジェンダー論的視点を欠いていたことを認識し、それを乗り越えようとする試みのはじまりでもあった。この学校の教師で設立時から学校運営にかかわるアグネタ・ヴィレーンは、イェテボリ女性民衆大学が女性向けコースを設置する他の民衆大学と根本的に異なる点は、女性運動との関わりの密度が格段に高いこと、従来の民衆大学にみられるような男性中心的な要素を学校運営から完全に排除し、すべてを女性の視点から展開しようとするラディカルな姿勢を持っていることであるという[24]。その背景には、既存の民衆大学に浸透している男性中心的な組織のありよう（彼女たちはこれを「家父長制的構造」と表現する）に対する厳しい批判がある。

女性会館において最初のコースが開講されたのは1979年のことである。ここでは、失業リスクの高い女性が労働市場の要求に応えうる職業技術を身につけることが目指され、男性の領域であるとみなされてきた技術系の教育がプログラムの中心にすえられた。また、幼い子どもを持つ女性が学習機会を奪われることのないよう、保育所の併設

にこだわった。さらに、労働市場においても保育所の利用においても最も不利な立場に置かれている移民女性に生徒の定員の半分があてられた。移民が急増しはじめた当時の社会において、移民たちへの差別的視点が増幅しつつあることに対する懸念もあったという[25]。

女性民衆大学が設立される1985年までの6年間に女性会館で開講されたのは、建築技術の実習と女性会館の改築作業とを兼ねた「建築コースByggkursen」である。これは20週間のコースで、初年度の参加者は20名、そのうち半分が移民女性で、必然的に教室は異文化の交流の場となった。併設された保育所には初年度には12名の子どもが入所している。6年間の参加者の総数は200人を超え、20歳から60歳代まで幅広い年齢層の女性が参加した。このコースに参加したスウェーデン人女性は全員が初等教育しか受けておらず、移民の生徒のなかには母国で全く教育を受けたことのない女性もいたという[26]。

「建築コース」は少人数グループでの作業を基本とし、計測法、道具の使用法、材料や電気系統についての学習、建築理論、製図、デッサンなどの学習がおこなわれた一方で、社会に関する知識、歴史、女性史、地理、スウェーデン語、宗教、生物学、産業理論などの学習もプログラムに組み込まれた。労働組合で活動する女性や女性政治家を招いた講演もおこなわれた[27]。運営にかかわることはすべて教職員と生徒による話し合いで決められ、食事の準備や清掃、建物の警備などもすべて自らの手でおこなった。フルティンによれば、こうしたやり方は組織運営にかかわる諸問題への「フェミニズム的対処」を目指すものであったという[28]。1983年春には「女性民衆大学運営基金Stiftelsen Kvinnofolkhögskolan」が設立された。1985年4月に学校教育庁への民衆大学設置申請が認められ、同年イェテボリ女性民衆大学が開校した[29]。

上に見てきたように、イェテボリ女性民衆大学の設立目的は、端的に表現すれば、女性たちが「自分自身の部屋」を獲得することにあった。それは、家父長制的な抑圧構造のもとで抑圧されてきた女性たちが能動的に社会に参加していくために不可欠であると認識された。男性を徹底的に排除した空間を確保することによってはじめて、女性たちは自らの生きやすさを探求することができるようになると考えられたのであった。運動学校の設立は、運動の理念を社会に発信し仲間を増やしていくための手段であるだけでなく、実際に運動を展開するための拠点をつくることでもある。その具体的な実践を以下に見ていきたい。

4　「意識化」をもたらす生活空間

イェテボリ女性民衆大学の校舎はイェテボリ市内の中心地にある雑居ビルのなかにあり、このビルの1階から3階までを占めている。さまざまな団体に交流の場を提供することがこの学校の重要な方針のひとつであり、校舎は女性運動の諸団体の活動の場でもある。通常の授業が終わった夜間や休日には、地元のさまざまな女性グループがやってきて会合をもったりセミナーを開いたりする。特に若い世代の女性活動家たちにとって、この学校は格好の交流スペースとなっている。

この校舎をよく利用する団体は、反ポルノやDV問題にかかわる活動をおこなうグループ、レズビアン団体、暴力行為に対する自己防衛セミナーを開催する団体、フェミニズムに関連する映画や音楽のウェブサイト運営をおこなうグループなどのほか、難民問題や平和問題、EU問題を議論するグループもあれば動物愛護や世代間交流活動をおこなうグループもあり、実に多彩である[30]。隔週の火曜日には、アナーキストフェミニズムの団体が食堂で「女性カフェ・モローラ Kvinnokafé Molola」を営業する。このカフェは、ベジタリアン向けのメニューを提供しながら講演や文化イベントの開催、運動関連書籍の販売などをおこなっており、さまざまな団体の女性活動家が集まり情報交換をする場となっている。

こうした活動に取り組む女性たちが、この学校に生徒として入学するケースも多い。この学校のコース編成は、一般教養と高等学校レベルの教育をおこなう一般コース、フェミニズムの理論と実践を学ぶフェミニズムコース、フェミニズム的視点から自然科学を学ぶ自然科学コースの三つで構成されているが、このうちフェミニズムコースで学ぶ生徒はほとんどが若い活動家たちで、フェミ

ニズムの基礎理論、組織運営やアクションの具体的な組み立て方、イベント開催のノウハウなどを学んでいる。学習しながら実際の社会に働きかけることを目指すプロジェクト形式の実習が多くおこなわれ、実践的で具体的なアクション学習が展開されている。

一般コースの場合、集まる生徒の入学動機はさまざまだが、約半数を占める移民女性がこの学校を選ぶ最大の理由は、女性だけの空間で学ぶ安心感にあるという[31]。移民の多くは中近東やアフリカから来ており、女性だけの教育空間は母国での伝統的な教育環境に近いのである。保育所が併設されていることも、彼女たちにとっては大きな魅力となっている。6 年前にイラクから来たというある生徒は、同じくイラクから来た友人にすすめられてこの学校に入学した。この学校の環境には非常に満足しており、自分もぜひ他の友人にすすめたいと語った[32]。

ヴィレーンによれば、移民の生徒の多くは入学当初は女性運動にほとんど関心を持っていない。移民でなくとも、一般コースには政治に積極的な関心を持たずに入学してくる女性のほうが多い。それでも、教師たちによる問題提起に共鳴し、徐々に自分たちが置かれている社会状況について考えるようになっていくのだという[33]。この学校では、教材も教師の話の展開も一貫してフェミニズムに立脚している。たとえば筆者が見学した移民向けクラスのある授業では、教材として女性民衆大学運営基金が公的に用いる文書のコピーが生徒たちに配られ、「女性民衆大学の理念」と題された文章を読み上げながらスウェーデン語の学習を兼ねて意味を確認していくという作業がおこなわれていた。教師は、なぜこの学校は女性だけを対象としているのかという問いを掲げ、女性の生活環境や生活経験、文化や歴史についても言及しながら、この学校がどのような運動を基盤として設立されたかを説明していく。生徒たちは自らの経験や日常的な実感を交えて意見を交換し、議論をしながら、女性として社会に生きることについて考察を深めていくのである。

他方、漠然とではあるがこの学校に何らかの可能性を感じて入学してくる女性たちもいる。地元紙イェテボリ・ポステン（Göteborg Posten）の記事で学校に対する思いを語った二人の生徒は、いずれも中部スウェーデン出身で、高校を中退して一旦仕事に就いたのち、3年前にこの学校に入学した。将来は専門職に就くことを目指している[34]。このうちの一人は、かつて公立成人学校（コムブクス）で教育を受けたが挫折した経験を持っている。もう一人は、男子生徒が幅をきかせる雰囲気が嫌になって高校を中退した。二人はそれぞれ友人と親族にすすめられてこの学校に入学したが、この学校の一員になったことによって「歴史の新しいページをひらいた気がした」と語っている。年齢構成も民族性も多様な女性が集う学校生活、あらゆる状況における女性の従属性が徹底的に議論される日々を通じ、彼女たちの学習に対する意識は大きく変化した。二人は以下のように述べている。「以前は強いられて勉強していたけれど、今ここで勉強しているのは、勉強することが楽しいから」「よいアイデアが浮かばなかったり、ものの見方を広げたいと思ったりするときに人は学ぶのだと思う。それに、仲間と共に学ぶことによって絆が深まる。ここでは人間として成長できます」。

彼女たちは、この学校に対してさまざまな偏見や先入観があることにも触れている。女性運動と結びついたこの学校が、一部の人々にとってはとても挑発的な存在であることは想像に難くない。彼女たちによれば、最近この学校を訪問したある政治家は、女性だけの閉じられた空間で自己満足的な「楽しい」活動がおこなわれていることを想定していたが、まじめな議論が展開されている様子を見て驚いていたという。この学校に対する偏見をなくすために多くの人に学校内部の様子を知ってもらいたい、と二人は述べている。

彼女たちは現在、それぞれの経験や個人的な関心事から導き出された問題意識にもとづいて卒業のためのプロジェクト研究に取り組んでいる。彼女たちが選んだテーマは、「ダイエットに励む女性たちの理想的身体像はどのように社会的に形成されるのか」、「漫画やアニメーション作品にみられる女性特有の同性愛描写と性的権力構造との関係」で、いずれも日常生活に深く浸透している性イメージを社会科学的な視点から問うものである。

彼女たちの語りは、この学校での生活経験が彼女たちにとって、フレイレのいう「意識化」のプ

ロセスとなったことをうかがわせる。フレイレの意識化概念では、人間の意識は閉じた社会から開かれた社会への移行にともない「非能動的意識」から「能動的意識」へと発展していくものとされる。「能動的意識」には、近視眼的、依存的で主体性を欠いた「未熟な能動意識」と、主体的で開かれた「批判的能動意識」の二段階が想定される。「非能動的意識」は、フレイレが「沈黙の文化」と呼んだ抑圧の状況にあたり、人々の意識はまだ開かれていない。人々が現実を問題であると認識するようになると意識は能動的になりはじめ「未熟な能動意識」が生じる。問題を深く分析し因果関係や付随的な相互関連を洞察することができるようになれば「批判的能動意識」に到達したとみることができる。人々の意識が最終段階の「批判的能動意識」に到達したとき、社会変革のための行動が生活の一部に取り入れられることが可能になる[35]。入学当初の彼女たちは、挫折を経験し生きづらさを抱えてはいたものの、それを社会的な問題であると認識してはいなかった。しかし学校生活を通じて自分たちの生きづらさの社会的背景あるいは問題を生じさせる社会構造を認識するようになり、今では学ぶことの意義を確信しながら自分自身が抱える問題の分析作業に取りかかっている。「未熟な能動意識」から「批判的能動意識」に達したと解釈することができよう。

ペルーからの移民女性の手記には、彼女自身の意識化のプロセスがより鮮明に描かれている[36]。当時4歳だった娘とともにスウェーデンにやってきたこの女性は、最初に住んだ地方都市でスウェーデン語教育を受け、生活手当を受給して暮らした。娘と二人で新しい家庭をつくりあげようとしていた彼女にとって、生活に必要なあらゆるものを整え、交友関係まで手配してくれるこの国の行政は本当にありがたいものだった。けれどもそこで手にしたものはすべて借り物で、自分たち自身のものではないという感覚が彼女につきまとったという。与えられたものを手にする生活に慣れてしまうと、自分がとても無力な人間であるように思えてしまう。彼女は完全に保護されている生活に疑問を抱くようになり、自律性を取り戻し自分自身で生活を選びとるために、イェテボリに引っ越すことを決意した。イェテボリは活気に満ちた大都市で、いろいろな選択肢があるだろうと考えたのだという。イェテボリ女性民衆大学のことは引っ越す前に職業紹介所で知り、保育所が併設されている点に魅力を感じたことに加え、この学校の一般コースで学べば、スウェーデン社会のなりたちを理解しそこに参加していくことができるようになるだろうと期待した。

しかしながら入学してみると、学校生活は彼女が期待していたようなものではなかった。校内をぐるぐると歩き回ったり、コーヒーを飲んだり、生徒自治会を開いたりして学校運営についての議論を続ける日々に、彼女は何度も違和感を持ち、少なからず落胆したという。けれどもそれは一時のことで、時間が経つにつれ、こうしたことはすべて、周囲の人や自分自身と正面から向き合い、自分のことや自分の置かれた環境についてより深く考えることを促すものなのだと気がついた。それから徐々に気持ちが安定していったという。彼女は、この学校で学ぶにつれて自分は活動的で自己批判的になり、政治や女性運動に対する見解も変化したと述べている。以前は自分の生活を政治やフェミニズムとかかわらせて考えたことは一度もなかったが、この学校での議論を通じてものの見方が成熟したと感じている。同じ意見を持つかどうかにかかわらず、尊敬を持って親しくつきあえる友人を得ることもできた。思想的立場の相違が思考の深まりを促進することもある。また、自律性と自信を身につけることができたのは、自分たち女性が社会を変えていけることを示してくれる誇り高い女性にたくさん出会ったからだと彼女は述べる。

女性であり移民であり母子家庭の母親である彼女は、何重もの疎外感を抱えていたが、期待と落胆を繰り返しながらも学校生活を通じて自律性と自信を身につけ、他の女性たちとの連帯感を獲得し、それを言葉にして他者に伝えるに至っている。彼女が自身の問題を認識しそれを社会と結びつけてとらえるようになったのは、教育プログラムの編成や授業の内容などよりはむしろ、この学校が独自に形成してきた生活環境によるものであった。女性たちのなかでも個々に抱える問題や苦悩はさまざまだが、この学校では生活空間そのものが個々人それぞれの意識化をうながしている。

本稿で用いた資料からは、この学校で学ぶ非活動家の女性たちが運動に積極的にかかわるようになったかどうか、社会に対して異議申し立てをおこなうに至ったかどうかは明らかでない。しかし、主流文化への対抗を基軸として連帯をつくりだすことが対抗的ヘゲモニーの形成に結びつくと考えるならば、この学校において女性たちが、自分の生きづらさが社会の権力構造に起因していること、自分の行動によってそれを変えていけることを認識し、仲間とともに学ぶことの意義をも認識していく過程から、男性中心社会を相対化する女性たちの公共圏が形成される可能性を読み取ることができるだろう。社会の支配的価値観に迎合することなく、自らの生活実感にもとづいて思考し行動することのできる自治的空間を得ることは、マイノリティの社会的な自己実現にとってきわめて重要である。スウェーデンの場合、かつて民衆運動のもとで組織化され制度化された民衆教育が、自治的空間の形成を促進する機能を果たしていると思われる[37]。

5　おわりに

イェテボリ女性民衆大学では、家父長制的な社会構造のもとで政治から排除されてきた女性たちが、それぞれに多様な生きづらさを抱えながら自身の問題に向き合い、自分と社会とのつながりを確認しつくりかえようとしている。こうした内的変容の過程は、運動と結びつきながらもそれに限定されるものではない。運動学校の形態をとりながらも、そこでの学びと運動との関係は実際にはゆるやかなものである。

社会運動と連携する教育機関が果たす機能は、運動に直接かかわる活動家の育成のみではない。このような教育機関がつくられることによって、運動にコミットしていない人々の意識が喚起される可能性が広がる。成人教育の場は、知識や技能を得るための場であるのみならず、ともに考える仲間を得て思考を深める場、共感や連帯感を育む場でもある。経験を共有することで形成される集合的アイデンティティは、社会への異議申し立てを正当化し、社会の変容を推し進める動因となりうる。この点においても、「新しい社会運動」と成人教育とは高い親和性をもつといえるだろう。

註

1) たとえば、佐藤一子編 (2004)『NPO の教育力－生涯学習と市民的公共性』東京大学出版会など。

2) Jarvis, P. (1985) *The Sociology of Adult &Continuing Education*, London: Croom Helm, pp. 144-145.

3) ジェルピ, E. (1983)『生涯教育－抑圧と解放の弁証法』前平泰志訳、東京創元社、17 頁。

4) Lovett, T., Clarke, C. & Kilmurray, A. (1983) *Adult Education and Community Action: Adult education and Popular Social Movement*, London: Croom Helm, pp. 1-11.

5) フォーリー, G. (2002)「民衆の闘争におけるインフォーマル教育」不破和彦編訳『成人教育と市民社会』青木書店、Foley, G. (1999) *Learning in Social Action: A Contribution to Understanding Informal Education*, London: Zed Books.

6) 一般に民衆運動には、労働運動や農業協同組合運動、消費者組合運動など経済的な連帯を基盤とする運動、禁酒運動や自由教会運動など理念的な連帯を基盤とする運動、社会民主主義運動などの政治的な運動、そのほか女性運動や青年運動、スポーツ振興運動などが含まれる。

7) 民衆教育組織の運営費用の大部分は国庫補助金と構成員団体からの会費により、民衆大学は学費無料、学習サークルの参加費もごく少額である。民衆教育への国庫補助が実現した経緯については、拙稿 (2004)「スウェーデン成人教育政策の史的展開」日本教育政策学会年報第 11 号で詳述している。現在の民衆教育制度の概要やそれをめぐる関係者の問題意識については、拙稿 (2005)「スウェーデンにおける民衆教育の性格変容」『比較教育学研究』第 31 号を参照されたい。

8) Sundgren, G. (2000) *Demokrati och bildning*, Borgholm: Bidningsförlaget, s. 81.

9) Nordvall, H. (2002) Folkbildningen som mothegemonisk praktik? i *Utbildning & demokrati* 2002, vol. 11, nr. 2, s. 15-32.

10) Ibid, s. 22.

11) Ett seminarium av Föreningen för folkbildningsforskning, Sigtunastiftelsen 20-22 november 2002, konferensdokumentation "Folkbildning och nya rörelser", s. 11.

12) Nordvall, H. (2002) s. 16.

13) 2006 年 6 月 7 日 13:30-14:30 にフェルネボー民衆大学イェテボリ分校にて事務局のピーア・エマヌエルソン (Pia Emanuelsson) 氏におこなったインタビューより。

14) Nordvall, H. (2002) s. 26.

15) 本稿では「新しい社会運動」を、権力作用によってゆ

がめられた社会的コミュニケーションのなかで排除された声を、有効に社会的コミュニケーションに組み込むことによって、能動的に社会の改訂に参加しようとする行為として把握している。野村一夫（1999）『リフレクション－社会学的な感受性へ』文化書房博文社、215-218頁を参照。

16) スウェーデン女性運動史については、Svanström, Y. & Östberg, K. red. (2004) *Än män då? Kön och feminism i Sverige under 150 år*, Stockholm: Atlas に詳しい。特に民衆運動における女性運動の位置づけの通史的把握を試みた論文として、Östberg, K. (2004) Först så går det upp... Svensk kvinnorörelse i ett longitudinellt perspektiv, i Svanström, Y. & Östberg, K. red. (2004) s. 143-166 がある。

17) 1970年代の「新しい女性運動」については、Schmitz, E. (2002) Den nya kvinnorörelsen under 1970-talet, i Olson, L. red. (2002) *Kärlek, makt och systerskap 30 år av kvinnokamp*, Göteborg: Goteborgs stadsmuseum, Westman Berg, K. (1979) *Gråt inte — forska! : kvinnovetenskapliga studier*, Stockholm: Prisma、グループ8の組織や活動については Isakson, E. (2004) Med, mot eller utan män? Diskussioner om kvinnokampens former inom Grupp 8, i Svanström, Y. & Östberg, K. red. (2004)を参照。

18) イェテボリ女性民衆大学については、設立5周年を記念して編集された資料集（Wirén, A. m.m. red. (1990) *Kvinnofolkhögskolan: 5-årsjubileum 1985-90*, Göteborg: Kvinnofolkhögskolan）や、設立に関わった活動家や現役の教師による活動紹介などでその概要を知ることができるほか、ウェインライトによる自治的な学校運営の困難をめぐる議論（Wainwright, H. (1994) *Arguments for a new left: answering the free-market right*, Oxford: Blackwell, chapter 5 "From social movement to self-management: a case study from the women's movement"）、ベーリット・ラーションによるジェンダー教育の観点からの教育実践分析（Larsson, B. (2002) Betydelsen av att komma till tals, i *Ord och Bild*, 2-3/2002, Larsson, B. (2004) *Vad menas med separatism, separat organisering och autonomi?* Kvinnofolkhögskolans skriftserie 1/2004）などがある。

19) Hultin, L. (1990) Varför en Kvinnofolkhögskola? i Wirén, A. m.m. red. (1990) s. 14.

20) Hultin, L. (1990) s. 14.

21) 当時の学校設立にかかわる文書でさかんに用いられた「自分自身の部屋 ett eget rum」「自分自身の学校 en egen skola」という表現は、ヴァージニア・ウルフの "A room of one's own" に倣ったもので、「自ら思考する力」を含意している。

22) Hultin, L. (1990) s. 17.

23) Larsson, B. (1997) *Ljus och upplysning äfven för qvinnan: Kvinnors medborgarbildning i den svenska folkhögskolan 1868-1918*, Göteborg: Anamma. 現在でも複数の民衆大学が女性のみを対象とするコースを設置しており、2006/07 年度に女性のみを対象とするコースを開講した民衆大学はイェテボリ女性民衆大学を除けば 14 校ある。女性のみを対象とする民衆大学としては、イェテボリ女性民衆大学のほか、労働運動におけるジェンダー格差に対する問題意識から 1987 年にストックホルムに設立されたロングホルメン民衆大学（Långholmens folkhögskola）がある。

24) 2006年6月7日 9:30 - 10:30 にイェテボリ女性民衆大学にてヴィレーン（Agneta Wirén）氏におこなったインタビューより。

25) Wirén, A. & Warberg, E. (1990) En skolan för kvinnor av kvinnor, i Grupp 8 red. *Kvinnobulletinen* vol. 20 nr. 1 Stockholm: Kvinnobulletinen, s. 73, Hultin, L. (1990) s. 17. 運営に関する意思決定のプロセスにおいては、教師・生徒関係、教師間関係の対等性が非常に重視され、あらゆる権力関係の排除が目指されているという。運営システムの内実については Wainwright, H. (1994) に詳しい。

26) Wirén, A. (1990) Då och Nu - historik, i Wirén, A. m.m. red. (1990) s. 24.

27) Wirén, A. (1990) s. 24.

28) Hultin, L. (1990) s. 17.

29) Wirén, A. & Warberg, E. (1990) s. 73-75, Wirén, A. (1990) s. 24-25.

30) Emanuelsson, P. (2003) *Folkbildnings framsyn: Aktivism & folkbildning, Rapport från Kvinnofolkhögskolan*, 2003-08-15.

31) ヴィレーン氏へのインタビューより。

32) 2006年6月7日 10:50-11:40 のA1クラスの授業後に生徒におこなったインタビューより。

33) ヴィレーン氏へのインタビューより。

34) 2006 年 5 月 14 日付 Göteborg Posten 紙 58-59 面 "Utbildning ger kvinnor makt" av Sanna Kilner.

35) フレイレ, P. (1967=1982) 里見実他訳『伝達か対話か―関係変革の教育学』亜紀書房、フレイレ, P. (1970=1979) 小沢有作他訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房。

36) "En övervattnad blomma" av Natalia Melino, i Wirén, A. m.m. red. (1990) s. 11.

37) 20 世紀後半以降に急増したムスリム移民もまた、民衆教育の制度を利用して自らの文化を実践する場を形成しつつある。拙稿（2006）「スウェーデン民衆教育における移民たちの政治的文化実践」日本学習社会学会年報第2号を参照。